

# コーパスを用いて「は」と「が」に関する三上説を検証する試み

著者	庵 功雄
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	4
ページ	199-204
発行年	2019
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002571">http://doi.org/10.15084/00002571</a>

## コーパスを用いて「は」と「が」に関する三上説を検証する試み

庵 功雄 (一橋大学国際教育交流センター) †

### Investigating theories on differences between *WA* and *GA* by Akira Mikami using corpus

Isao Iori (Hitotsubashi University)

#### 要旨

「は」と「が」は日本語文法の根幹に関わる要素であるだけでなく、両者の違いを明らかにすることは日本語における予測の実相を考える上でも重要である。本発表では、「は」と「が」の違いに関する三上章の主張の妥当性を CSJ-RDB を用いて検証した。

#### 1. はじめに

理解のための文法、特に「聞くための文法」を構築するためには、「予測」の研究が不可欠である (寺村 1987, 石黒 2008)。また、線条性の制約を踏まえた言語処理研究、すなわち「実時間内処理可能性 (online processability) (庵 2007)」の解明はテキスト言語学の究極の課題であるが、これに関しても、「予測」の実相を明らかにすることは重要である。

しかし、人間の脳内における言語処理を直接的に把握することは極めて難しく、心理言語学的手法による研究が進んできているとは言え、「予測」といった大きな単位の処理の解明にはまだ時間がかかるように思われる (de Beaugrande & Dressler 1981 も参照)。

発表者は、こうした「予測」に関して、「は」と「が」の異なりが重要な働きをしていると考えている。この考えは、「は」と「が」に関する三上章の指摘に基づくものであるが、本発表では、「は」と「が」の使用実態における定量的異なりをもとに、「予測」さらには「実時間内処理可能性」の解明に向けた第一歩を考えてみたい。

#### 2. 「は」と「が」に関する三上説

三上章は生涯にわたって「主語廃止論」を唱えた (三上 1953, 1960, 1963)。主語廃止論は狭義には否定されたかもしれない (cf. 原田 1973, 柴谷 1985, 庵 2012) が、三上の意図を「「は」と「が」に異なるラベルを貼ること」と捉えれば、三上の主張は現在の日本語学において基本的に認められているように思われる (cf. 野田 1996, 庵 2003, 2014, 堀川 2012)。

本発表でも、基本的に「は」と「が」の違いに関する三上の主張を妥当と認めた上で、その中でも特に三上 (1960) が「ハの本務」と呼ぶ現象について、「が」との対比から、その実態をコーパスを用いて検証する。

##### 2.1 ハの兼務

三上 (1960) は、「は」は、主題としての役割に加え、「が」や「を」などの役割も兼ねていると見ている (庵 2003, 2012 も参照) <sup>1</sup>。

- (1) a. 太郎はこの本を書いた。
- b. 太郎がこの本を書いた (こと)

---

† isaioiri@courante.plala.or.jp

<sup>1</sup> こうした三上説に対する有力な批判については堀川 (2012), 庵 (2014) を参照。

- (2) a. この本は太郎が書いた。  
 b. この本を太郎が書いた (こと)

例えば, (1a) の「太郎は」は格としては「太郎が」であり, 「は」は「が」の機能を兼ねている。一方, (2a) の「この本は」は格としては「この本を」であり, 「は」は「を」の機能を兼ねている。このように, 「は」が「が」や「を」の機能を兼ねることを三上 (1960) は「ハの兼務」と呼んでいる (庵 2003, 2012, 2018 参照)<sup>2</sup>。

## 2.2 ハの本務

三上 (1960:115) は「は」と「が」の違いについて, 次のようにまとめている。

- (3) a. は : 係助詞 心理的 (虚) 大きく係る  
 b. が : 格助詞 論理的 (実) 小さく係る

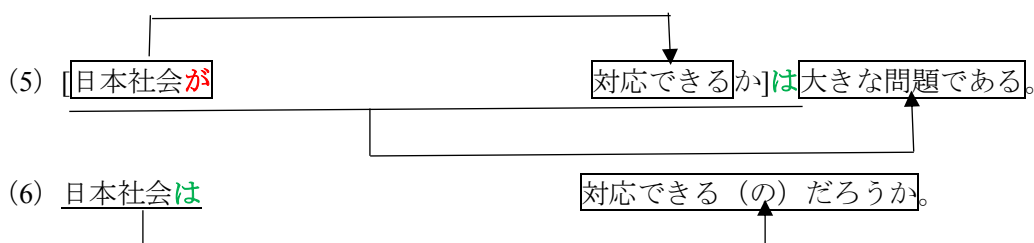
これは, 「は」は文末まで係るのに対し, 「が」は従属節までしか係らないということでもある<sup>3</sup>。三上のこの指摘は, 日本語の情報処理を考える上で極めて重要なものであると筆者は考えるのだが, 三上 (1960) 以降の研究史において, 「ハの兼務」は取り上げられることが多い<sup>4</sup>のに対し, 「ハの本務」についての言及は乏しい。

三上の (3) の指摘は日本語教育においても重要である。

- (4) しかし, 日本社会は多数の外国人受け入れに正しく対応できるかは大きな問題である。

(4) は上級 (超級) 学習者の誤用例だが, この例の修正案として次の2つが考えられる。

- (4) しかし, 日本社会は多数の外国人受け入れに正しく対応できるかは大きな問題である。



つまり, 「が」を使うか「は」を使うかでその後の文の展開が大きく異なるのである。もう1つ, 三上 (1960:137-138) から興味深い例を引用する。

- (7) ところがソ連の発表はまるで違う。その米飛行機はウラル山中の上空まで侵入し, そこでロケットの一撃で撃ち落としたのだという。(「天声人語」)

この場合, 事実としては, 「撃ち落とした」のはソ連だが, 「そこで」の前後に「ソ連が」を明示的に入れない限り, 文法的には打ち落としたのは「その米飛行機」になる。これも, 「ハの本務」の影響である。

<sup>2</sup> 「ハの兼務」は「は」がとりたて助詞であることによるものである (cf. 三上 1963, 庵 2012)。

<sup>3</sup> 「は」と「が」に関するこの捉え方は, 尾上 (1973) の「は-結文の粹, が-文核」という捉え方とも通い合うものと考えられる。

<sup>4</sup> 例えば, (1b) (2b) に見られる「コト化」は日本語学の文献では無定義で使われることが多い。

### 3. コーパスを用いて三上説を検証する

本発表では、(3)に見られる三上の一般化をコーパスを用いて検証することを試みる。そのために、日本語話し言葉コーパス RDB 版 (CSJ-RDB) を用いる。

#### 3.1 CSJ および CSJ-RDB について

日本語話し言葉コーパス (CSJ) は自発性の高い独話を主対象とした日本語の音声コーパスであり、種々の学会における実際の研究発表 (学会講演) と、一般話者による主に個人的な内容に関する 10 ~15 分程度のスピーチ (模擬講演) がその中心を占める。これ以外に対話データも一部含まれるが、本発表では独話データのみを用いて分析を行った。

分析には CSJ-RDB Version 1.0 を用いた。CSJ-RDB は、日本語話し言葉コーパス (CSJ) のコアデータをデータベースソフトで検索できるようにしたもので、係り受け情報などが利用でき、統語的分析にも有用である (係り受けや節単位情報については丸山他 2006 を参照した)。

#### 3.2 検索方法

本発表では、CSJ-RDB ver.1.0 を Navicat Premium ver.12.1.20 を用いて検索した。検索方法は、次の通りである。

- (8) a. 「は」で終わる文節 A を含む節において、文節 A の係り先の文節 B を係り受け情報を用いて特定する。
- b. 「が」で終わる文節 C を含む節において、文節 C の係り先の文節 D を係り受け情報を用いて特定する。
- c. 文節 A および文節 C が主語であるか否かを目視で確かめ、主語であるものだけを考察対象とする。
- d. 文節 A~D の位置情報を用いて、係り元と係り先の文節間の距離 (文節数) を測る。
- e. 係り先の文節の統語情報 (文末、連体節など) を目視で確認する。

### 4. 結果

本節では分析結果について述べる。

#### 4.1 統語的性質との関連

初めに、統語的性質との関連を述べる (↑: 有意に多い, ↓: 有意に少ない)。

表1 統語的性質と「は」と「が」

統語的性質	「は」頻度	「が」頻度	合計
文末	2649↑	1619↓	4268
と節・か節	228↓	739↑	967
並列節 <sup>5</sup>	948↑	871↓	1819
連用節 <sup>6</sup>	480↓	1461↑	1941
連体節	277↓	1905↑	2182
合計	4582	6595	11177

<sup>5</sup> ここには「が節、けど節 (「けれども」などを含む)、し節」と並列の「て節」「で節」を含む。

<sup>6</sup> この「連用節」は「並列節」「連体節」以外の節という意味で、「連用形で終わる節」とは異なる。

表 1 からわかるように、「は」は「文末」と「並列節」で有意に多く、「が」は「と節・か節」「連用節」「連体節」で有意に多い<sup>7</sup>。

#### 4.2 文節間の距離

次に、文節間の距離について述べる。

表 2 「は」と「が」と平均文節数

	は	が
文末	7.59	2.82
と節・か節	6.76	2.29
並列節	5.66	2.53
連用節	5.64	2.32
連体節	6.56	2.32
全体	6.88	2.47

「は」に関する 1 要因分散分析の結果は次の通りで、

$$F(4, 4577) = 20.80, p < .01$$

Holm 法による多重比較の結果、「文末」と「並列節」、「文末」と「連用節」の間には有意差が見られたが、それ以外の性質間には有意差は見られなかった。

「が」に関する 1 要因分散分析の結果は次の通りで、

$$F(4, 6590) = 9.75, p < .01$$

Holm 法による多重比較の結果、「文末」と「と節・か節」、「文末」と「連用節」、「文末」と「連体節」には有意差が見られたが、それ以外の性質間には有意差は見られなかった。

以上の結果から、「は」でも「が」でも「文末」が最も大きく係ると言える。

また、「は」と「が」の「文末」どうしを対応のない t 検定した結果は次の通りであり、

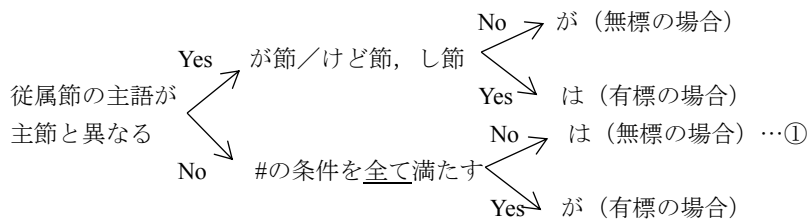
$$t(4266) = 50.38, p < .001$$

「は」の「文末」の方が有意に文節間の距離が長い。すなわち、「は」の方が「が」よりも同じ文末用法でも大きく係ると言える。

#### 5. 考察

以上見たように、「は」と「が」では、係り方および係り受け関係にある文節間の距離（文節数）の間に大きな違いがある。

まず、頻度から見ると、「は」は「文末」と「並列節」で有意に多いのに対し、「が」は「と節・か節」「連用節」「連体節」で有意に多い。これは、三上（1960）の（3）および、庵（2018）で挙げた図 1 のフローチャートの妥当性を示している。



# : 1) 主語は3人称 2) 述語は動詞で「いつも」の意味ではない 3) 主語はそのテキストで初出  
①の場合に「が」を使うと、総記の意味になる

図1 「は」と「が」の使い分けのフローチャート

<sup>7</sup>  $\chi^2(4) = 2415.67, p < .001, \text{Cramer's } V = 0.458$

一方、文節間距離から見ると、「は」の方が「が」よりも全体として係り方が大きい。特に「文末」の場合にそれが著しい。これは模式的に考えると、「は」の場合は、(9)の「...」の部分には自由に要素が入りうるのに対し、(10)の「...」の部分には入りうる要素が限られていることを示している。

(9) Xは.....Y

(10) Xが.....Z

これは、「が」は格助詞で命題レベルの働きをするのにとどまるのに対し、「は」は係助詞（とりたて助詞）として文末を志向するという、「は」と「が」の助詞としての機能の違いの反映であると考えられるが、これはまさに三上の主張と合致する（三上 1960, 1963）。

以上のことから、三上が主張した「は」と「が」に関する(3)の特徴付けはコーパスによって基本的に検証されたと言える。

## 6. 理論的含意

このように、「は」と「が」に関する三上の指摘が基本的に正しいとすれば、こうした関係をより大規模に調査することで、予測の実相に迫ることが可能になる可能性がある。コーパスを用いて予測を検証するという考え方は、予測が usage-based な形で形成されているとすれば、理論的にも妥当であると言える。何より、調査にかかるコストを大幅に減少させられる可能性がある。今後はこうした方向性のもと、コーパスを用いた検証作業を行っていく必要がある。

## 7. おわりに

本発表では三上章が指摘した「は」と「が」の機能の違いをコーパス（CSJ-RDB）を用いて検証した。その結果、三上の指摘は基本的にコーパスにおいて裏付けられたと言える。

また、「は」と「が」の使い分けとは異なるが、「は」がつく副詞／接続詞も読解において重要である（ex. 実際／実際は、今（で）は、以前は）。今後のテキスト研究の1つの方向性として、これら広義の予測成分や、筆者の主張を示す成分に関する定量的な研究を増やしていくことが、言語学的な意味でのテキスト理解だけでなく、日本語教育、国語教育にとって重要な意味を持つものと考えられる。

## 文 献

- 庵 功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門』くろしお出版  
 庵 功雄 (2007) 『日本語研究叢書 21 日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版  
 庵 功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』スリーエーネットワーク  
 庵 功雄 (2014) 「書評 堀川智也 著 『日本語の「主題」』『日本語文法』14-1  
 庵 功雄 (2018) 『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版  
 石黒 圭 (2008) 『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房  
 尾上圭介 (1973) 「文核と結文の枠」『言語研究』63  
 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10  
 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5  
 寺村秀夫 (1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版に再録  
 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版  
 原田信一 (1973) 「構文と意味」原田信一 (2000) 『シンタクスと意味』大修館書店に再録  
 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房  
 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2006) 「第5章 節単位情報」報告書『日本語話し言葉コーパ

- スの構築法』 [https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/csj/k-report-f/05.pdf](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/k-report-f/05.pdf)  
三上 章 (1953) 『現代語法序説』 くろしお出版から復刊 (1972)  
三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版  
三上 章 (1963) 『日本語の論理』 くろしお出版  
de Beaugrande, R. & Dressler, W.U. (1981) *Introduction to Text Linguistics*. Longman.

#### 使用したコーパス

日本語話し言葉コーパス RDB 版 『CSJ-RDB』 Version 1.0